

● 罪の意識のズレ

伝兵衛の付き人にウメが復讐する場面(p.190「血の道」)で、追いつめられた伝兵衛の付き人が命ごいにウメにいう。

「お前が見つけた鉾を横取りしたのを恨んでいるのか。わ、分け前をやる!伝兵衛さんに頼んでやる。約束するから助けてくれ!」

血の混じった唾を飛ばしながら男が喚く。何を言っているのか、わからなかった。聞こえるのだが、言葉が頭に入っていない。男が奇妙に曲がった手で、必死に懷から巾着袋を出そうとしているのを呆然と眺めていた。「ここに、この中に、銀がある!やる!お前に全てやるから……」

足が動いた。男の手を踏みつけていた。耳をつんざくような悲鳴が抜けていく。

ウメを襲ったことを忘れていないわけではない。この男にとっては、何でもないことなのだ。

生意気な小娘を懲らしめた程度の、戯れのような出来事なのだ。犯された女が復讐するなどは夢にも思わない。銀を手にした伝兵衛を羨んでいるとしか見ていない。

このときのウメと**伝兵衛の付き人**のあいだの、罪の意識のズレをみることができる。伝兵衛の付き人もたしかに、罪の意識をもっている。が、しかしそれは、銀山採掘において、諍いなく銀堀をおこなうために人が定めた取り決め = ルールへの罪の意識にすぎない。しかし、ウメが被り、みている罪は次元が異なる。

このとき、犯すべからざるものが犯された、と感じる、伝兵衛の付き人によって蹂躪されたものは、なにか?

さて、読者としては、ウメに仮託して、伝兵衛の付き人を「けしからん」というのは容易いが、むしろこの小説から感じられるのは、じつはわたしたちは、伝兵衛の付き人のように、蹂躪に与している人間ではないか、という拭いがたい後ろめたさではないか。そしてこの小説がつくりだす立体感は、そのような視点ではないか。

● 間歩の開発

関ヶ原の戦い(1600年)を端境に、銀山の支配が変わる。間歩の開発と、ウメの蹂躪がかさなる。

すなわち、「山」への恐れのようなものが次第に喪われていくさまを、ウメの物語をつうじて、ウメとかさねて感じることができる。

	喜兵衛	大久保十兵衛長安、竹村丹後守
間歩のありかた	○ 銀龍の如き巨きな鉉の在処を喜兵衛から教わっていた。けれど、喜兵衛は今は違う間歩を掘っている。<u>喜兵衛は無闇に掘ることはしない。湯水のように銀が出れば、人が押し寄せ、山は廃れる。</u>そう言っていた。(p.146) ○ 鉉を追って深く掘り進めれば、どうしても水が湧いた。多くの鏈を含む鉉を見つけても、水が出て掘れなくなることは常だった。そんな時、喜兵衛は屹然と手を引いた。<u>山がこれ以上はいけんと言うとる、と違う鉉を探した。</u>(p.227)	隼人「一本の鉉を追うて潜るんじゃのうて、山の中を斜めに走る幾本もの鉉に当たるように横へと掘られとるんじゃ。鉉に行き当たったら水抜きをしながら上や下へ掘っていく。山を貫くこともできるし、違う間歩に繋げることもできる」 ウメ「誰じゃ、と思う。<u>銀の山を穿ち、掘り尽くさんとする者は誰じゃ。</u>」
町のようす		太鼓の音の響く山に背を向け、藁を買いに町の外れへと歩きだす。町は何でも手に入るが、すべて銭が要る。山では枝を拾い、木を伐っていたが、町では薪も買わねばならない。薬も、野菜も、米も、隼人が銀を掘って稼いだ銭で求めている。(p.209)
	配慮、気遣い、想像	合理化、効率化の端緒

● おまけ 中沢新一(1950-)が紹介するハイデガー(1889 - 1976)の技術論を想起させた。

近代技術とは何でしょう。近代技術も「あらわにあばくこと」でできています。この根本の特性を静かに凝視してみますと、近代技術という新種がようやくその姿を見せはじめるようになります。

(中略)近代技術に統一的な意味をあたえているこの「あらわにあばく」やり方は、自然に向かって、運搬貯蔵が可能な形でエネルギーを供給すべきであるという要求を突きつけて、挑発するやり方になってきています。(中略)石炭や鉉石を採掘するためには、ある地帯はじっさいに挑発されるのです。その地域はいまや石炭鉉区となり、その土壌は鉉床として、自分の姿を「あらわにあばいて」いるではありませんか。そうなるとかつての田畑は一変してしまいます。かつては農民が手入れをしていた田畑、その頃はまだ土壌から何かを仕立て上げることを、育てるとか耕すと農民が呼んでいた、その田畑も一変するのです。農民の仕事は耕地を挑発したりいたしません。穀物の種をまくにあたっても、種の芽生えは植物の生長する力にゆだねられていましたし、農民はただその繁殖を見守っていただけです。ところが田畑の手入れそのものが、いまや自然を立たせるという渦の中に巻きこまれてしまったのです。いまの農業のやり方では、耕地の手入れはそれを挑発して自然を立たせる行為に変わってしまいました。耕作は今日では、動力の導入された食品工業になってしまいました。(中沢新一『愛と経済のロゴス』 p.201)